

科学研究費補助金「一橋大学社会科学古典資料センター所蔵の旅行記
についての研究」中間報告（2）
一橋大学社会科学古典資料センターが所蔵する
トーマス・スタウンソンらの訳書と著書の紹介
— トゥリシェン（図理琛）『異域録』の英訳版（1821）を中心に—

Interim Report (2) : Grants-in Aid for Scientific Research “Study on Books
of Travel Deposited at the Center of Historical Social Science Literature,
Hitotsubashi University” : Introduction of Thomas Staunton’s Works

江夏由樹・福島知己・床井啓太郎

ENATSU Yoshiki, FUKUSHIMA Tomomi and TOKOI Keitaro

1. はじめに

一橋大学社会科学古典資料センター（以下、センターと略す）には1850年以前に刊行された欧語図書（約8万冊）、さらに多数のパンフレット、マニュスクリプト等が所蔵されている。これまで、経済学説史、経済思想史、社会思想史、書誌学などの分野において、これら資料は積極的に利用されてきた。そうしたなかで、本研究プロジェクトは、歴史学の方面からこうした資料に接近する可能性を探るものとして、西欧人によるアジア旅行記に着目してきた。センターには西欧人らが19世紀半ば以前に記した旅行記がかなりの数で所蔵されており、その概要は前稿に記した通りである¹。本研究は、これら旅行記の一冊一冊の内容を明らかにするなかで、当時の欧州人のアジア観に迫る資料を検討していくことを課題としている。

そうした研究関心から、ここに紹介したい資料は、Staunton, Sir G.T., *Narrative of the Chinese Embassy to the Khan of the Tourgouth Tartars, in the years 1712, 13, 14, & 15 by the Chinese ambassador, and Published by the Emperor’s Authority, at Peking translated from the Chinese, and accompanied by an appendix of miscellaneous translations*, London, 1821である。清朝の官吏であった満洲人のトゥリシェン（図理琛）は康熙帝の命により、1712年から15年にかけて、当時、カスピ海の北方に住牧していたトゥルグートのハンのもとを訪れた。本資料はトゥリシェンが記した旅行記、『異域録』の英訳である。その訳者であるトーマス・スタウンソン（Staunton, Sir George Thomas, 1781-1859）は父のレナード・スタウンソン（Staunton, Sir George Leonard, 1737-1801）とともに、1793から94年、英国のマカートニー（George Macartney）使節の一員として中国を訪問した人物として知られている。この『異域録』の英訳は、当時、150部が印刷されたのみであり²、日本国内では本センターが所蔵しているこ

¹ 江夏由樹・福島知己・床井啓太郎「科学研究費補助金：一橋大学社会科学古典資料センター所蔵の旅行記についての研究」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』No. 34、2014年3月、41-57頁。

² トゥリシェン（今西春秋訳注・羽田明編訳）『異域録』（東洋文庫445）平凡社、1985年、216頁。

とを確認できるだけである。この英訳『異域録』に加え、センターにはレナード・スタウントン、トーマス・スタウントンの記した書物、その訳書（仏語、独語）が、確認できるだけで、14冊ほど所蔵されている。これら書物の内容は当時のイギリス人のアジア観、中国観を知ろうえで貴重な資料となりうる。そこで、本稿はトーマス・スタウントンに焦点を絞り、その人物、センター所蔵のかれの著作等について若干の考察を試みたい。

2. スタウントン親子について

トーマス・スタウントンの父であるレナード・スタウントン（1737-1801）の生涯は変化に富んだものであった。かれはアイルランドのゴルウェイ出身であり、フランスのモンペリエ大学で医学の博士号を取得したのち、西インド諸島で医師、また、ドミニカ知事の秘書などの公務を務めた。その後、グレナダ島で土地経営に携わるかたわら、法律家としての経験を積みあげていった。かれは、1774年、グレナダ島の知事として着任したジョージ・マカートニーと親しい関係を得る。1779年のフランスによるグレナダ島の攻撃・占領の際、スタウントンはマカートニーの副官・義勇軍指導者として同島の守備にあたった。マカートニーとスタウントンはフランス軍に捕えられ、パリに送られたものの、スタウントンの尽力でマカートニーは釈放された。1781年、マカートニーがマドラスの知事に任命された際、スタウントンはその秘書として随行し、その後もマカートニーの腹心としてイギリスの対インド政策のなかで重要な役割を果たした。こうした両者の親密な関係から、マカートニーが中国に派遣された際、レナード・スタウントンは使節の第一書記官（副使）に任命され、マカートニーに事故のあった場合には、その使節団長を務めることとなった。

マカートニーの使節には、レナードの息子であるトーマスが同行した。中国への出発に先立ち、通訳探しのため、レナードはフランス、イタリア、ドイツを旅したが、これにトーマスも同行した。レナードはナポリで漢語の通訳2名を得ることができたが、トーマスは早々にこれら通訳から漢語を学び、12歳にしてラテン語、ギリシャ語、フランス語、漢語を解したという。トーマスはラテン語と漢語の通訳として、マカートニーの使節が現地で清朝との交渉を進めるなかで重要な役割を果たした³。例えば、マカートニー（坂野正高訳注）『中国訪問使節日記』のなかには、トーマスの記した漢語の文章の写真が収められている。

マカートニー使節の帰国後、トーマス・スタウントンは、1799年、東インド会社の書記官として中国に赴いた。同社のカントン・ファクトリーの船荷監督、首席通訳等を務めるかたわら、かれは、ファクトリーで最初に漢語を学んだ人物として、英語と漢語の文献の翻訳に精力を注いだ。1816年1月、かれはカントンのファクトリー代表に任命され、同年7月にはアマースト（William Amherst）使節の随員として中国に赴いた。アマースト使節は清朝皇帝への「三跪九叩頭礼」を拒み、皇帝への謁見も叶わなかったが、これにはスタウントンの意見が強く反映していたという。1817年に中国から帰国した後、スタウントンは国会議員を長く務め、アジア・中国通の政治家として、幅広い活動を展開した。例えば、1830年には下院の東インド委員会（the East India committee）、1834年には茶税委員会（the tea duties committee）の

³ “Staunton, Sir George Leonard,” *Dictionary of National Biography*, edited by Sidney Lee, Vol. XVIII, London, 1909, pp. 1000-1001. マカートニー（坂野正高訳注）『中国訪問使節日記』（東洋文庫：277）（平凡社、昭和50年）「解説」（坂野正高筆）316-319頁。

委員にも任命されている。学術的な活動にも熱心であり、1823年、かれは王立アジア協会（the Royal Asiatic Society）を設立し、3000冊の中国書をそこに寄付した。また、1853年にはハクルート・ソサエティー（Hakluyt Society）のために「中国史」を編纂した⁴。

上記のように、18世紀末から19世紀初期、中国を実際に訪れて、清朝との交渉を担当し、アジア通としてイギリス社会のなかで強い影響力を有したトーマス・スタウントン、レナード・スタウントンらがどのような中国観を有していたのかを探ることは大変興味深い。その意味でセンターに所蔵されているかれらの著作は重要である。

3. スタウトンの訳書・著作

(1) トーマス・スタウントン訳『異域録』

「はじめに」で紹介したように、*Narrative of the Chinese Embassy to the Khan of the Tourgouth Tartars, in the years 1712, 13, 14, & 15 by the Chinese ambassador, and Published by the Emperor's Authority, at Peking, translated from the Chinese, and accompanied by an appendix of miscellaneous translations* はトゥリシェン（図理琛）『異域録』の英訳本である。康熙51（1712）年5月、清朝の使節として、満洲人のトゥリシェンらの一行30余名は北京を出発、内外蒙古からロシア領のシベリア・ヨーロッパ方面に向かい、当時、カスピ海の北方に住牧していた（西モンゴル族の）トゥルゲートのハンのもとを訪れ、康熙54（1715）年3月に北京に戻った。その旅行記が『異域録』であり、満文本と漢文本がある。清朝がこの時期に対外的な使節を送り、かれらが自ら見聞きした事柄を述べていたことにまず注目される。この旅行記は当時のロシア領シベリア・ヨーロッパ地域の様子を記したものとして貴重な史料であり、ヨーロッパ社会でも強い関心を集めた。したがって、早い時期から、『異域録』は仏語（ゴピール訳、1729-32年）、独語（ミューラ訳：部分訳、1760年）、英語（スタウントン訳）、ロシア語（ロソヒン訳、1764年）等に翻訳された。今西春秋訳注・羽田明編訳『異域録』は満文本、漢文本の双方を研究の対象とした日本語訳として有名である。今西春秋は、『異域録』の満文本が漢文本に勝ることを強調し、18世紀初頭に北京に留学していたロソヒンが、満文本を底本として翻訳したロシア語版を高く評価している。同時に、今西は漢文本を底本としたスタウントンの英訳版も忠実な翻訳がなされていると述べている⁵。スタウントンの『異域録』英訳版は当時150部ほどが印刷されただけであり、現在、日本国内では本センターの所蔵を確認できるのみである（【図版1】）。

スタウントンの英訳版の特徴の一つは、トゥリシェンの記述をジョン・ベル（John Bell, 1691-1780）の著作から確認する作業を行っていることである。ベルはイギリス人医師であり、ロシアのピョートル大帝に仕え、1719年から21年にわたり、ロシアのイズマイロフの隊商付医師として北京に赴き、その旅行記を *Travels from St. Petersburg in Russia, to various parts of Asia* としてまとめた⁶。イズマイロフの隊商はトゥリシェンの辿った道を、その数年後にほぼ同じ行程を逆に旅したことから、『異域録』とベルの旅行記の内容を比較検討すること

⁴ “Staunton, Sir George Thomas,” *Dictionary of National Biography*, edited by Sidney Lee, vol. XVIII, London, 1909, pp. 1001-1002.

⁵ 前掲『異域録』216頁。

⁶ “Bell, John,” *Dictionary of National Biography*, edited by Sidney Lee, Vol. II, 1908, pp. 166-167.

は大変興味深い。本センターはスタウンTONの『異域録』英訳版に加え、ベルのこの旅行記も所蔵している。John Bell, *Travels from St. Petersburg in Russia, to various parts of Asia : illustrated with maps, in two volumes*, Printed for William Creech, Sold by Geo. Robinsons, 1788.

今西春秋が記した「解題」にもあるように、スタウンTONの英訳版の特徴の一つは付録として『元曲百選』『王嬌李』などの抄訳が収められていることである⁷。これらは『異域録』の内容と直接関係はないが、なぜスタウンTONがこれらの部分訳を加えたかということは、その序文である“Preface”を読むと推測ができる。かれはここで、『異域録』の原文を英語に翻訳することが如何に困難な作業であるかを説明し、翻訳のためには、中国の政治・制度・慣習、自然、文化などを深く理解すること、そのためには中国人自身が記した文章を読むことの必要性を強調している。序文のなかで、スタウンTONは当時の清朝の政治・外交、『異域録』の内容、また、その叙述がロシアと中国との歴史的関係を考察するうえで極めて貴重な資料であることを論じている。さらに、ここでは、中国の植物学、小説、戯曲などの特徴が細かに述べられている⁸。つまり、スタウンTONにとって、『異域録』の英訳版は単なる翻訳ではなく、そこには、中国の社会・文化などをヨーロッパに紹介するという目的があった。この序文を読むことにより、スタウンTONの中国観にかなり迫ることができるが、このことは、かれの他の著作についてもいえる。

(2) トーマス・スタウンTONの他の著作

トーマス・スタウンTONの著作として、次に紹介したい資料は、Sir George Thomas Staunton, *Miscellaneous Notices relating to China, and our commercial intercourse with that country, including a few translations from the Chinese language*, London, 1822 及び、Sir George Thomas Staunton, *Miscellaneous Notices relating to China, and our commercial intercourse with that country, including a few translations from the Chinese language*, Part the second, for private circulation only, 1828 である。本センターはこれらの資料を2セット所蔵している。

スタウンTONはこれらの書物のなかで、中国の政治、外交、貿易、歴史、文学、古典などの様々な事柄についてエッセーやノートを書き、また、関連する中国文献の英訳を行っている。また、かれは英文の漢訳も行っており、例えば、George Pearson の種痘に関する研究の抄訳である『啞唎国新出種痘奇書』は、上記の「Part the second」に収められている（【図版2】【図版3】）。これらノート・エッセー、翻訳から、スタウンTON、そして、当時のイギリス人のアジア観、中国観を考察する糸口を探ることができるかもしれない。

スタウンTONがアマースト使節に随行したことは、すでに述べたが、その記録が George Thomas Staunton, *Notes of proceedings and occurrences during the British embassy to Peking in 1816*, Havant Press (for private circulation only), 1824 である。この資料も、確認できる限り、日本国内では本センターに所蔵されているだけである。本書には1816年7月から1817年1月までの使節の行動が毎日記録されており、アマースト使節の行動、また、彼らと清朝との間の

⁷ 前掲『異域録』217頁。

⁸ “Preface,” in *Narrative of the Chinese Embassy to the Khan of the Tourgouth Tartars, in the years 1712, 13, 14, & 15 by the Chinese ambassador, and Published, by the Emperor's Authority, at Peking, translated from the Chinese, and accompanied by an appendix of miscellaneous translations.*

交渉過程を考察するうえで貴重な資料となりうる。

(3) レナード・スタウントンの著作

センターにはトーマス・スタウントンの訳書・著作に加え、父のレナード・スタウントンの記した書物も所蔵されている。一つは、Sir George Staunton, *An authentic account of an embassy from the King of Great Britain to the Emperor of China*, London, 1797, 2 volsである。本書はレナード・スタウントンが記したマカートニー使節の詳細な記録である。

もう一冊は、*An historical Account of the embassy to the Emperor of China, undertaken by order of the King of Great Britain including the manners and customs of the inhabitants; and preceded by an account of the causes of the Embassy and voyage to China*, abridged principally from the papers of Earl Macartney, as compiled by Sir George Staunton, London, 1797. この資料もマカートニー使節の記録であるが、前者に比べ、分量的には少ないことから、内容を簡略にしたものと考えられる。ただし、こちらは、前者に比して、挿絵・地図などが多い。これら二つの資料の比較検討が今後の課題となっている。なお、これら英語の原典のフランス語訳、ドイツ語訳と考えられる資料もセンターに所蔵されている。

Voyage dans l'intérieur de la Chine, et en Tartarie, fait dans les années 1792, 1793 et 1794, par Lord Macartney, Ambassadeur du Roi d'Angleterre auprès de l'Empereur de la Chine, Paris, An 6 de la République (1798).

Des Grafen Macartney Gesandtschaftsreise nach China : welche er auf Befehl des jetzt regierenden Königs von Großbritannien, George des Dritten, in den Jahren 1792 bis 1794 unternommen hat, Frankfurt und Leipzig, 1798.

英語の原典とこれら翻訳との比較検討も今後に残された課題である。

4. まとめ

本報告はセンターにおけるレナード・スタウントン、トーマス・スタウントンの著作の所蔵状況をまとめたものであり、個々の資料の内容についての本格的な検討は今後の課題である。センターにはイギリスのマカートニー使節、アマーフト使節に随行したスタウントン親子の記した文献が相当数収められていること、また、これら資料を歴史研究の分野から利用する可能性を確認できたことは大きな収穫であった。ここで紹介した資料の読解を進めるとともに、さらにセンター所蔵の旅行記に関する資料の研究を進め、18-19世紀の東西交渉史に資する文献の紹介に努めていきたい。

(えなつよしき・一橋大学大学院経済学研究科特任教授)

(ふくしまともみ・一橋大学社会科学古典資料センター専門助手)

(とこいけいたろう・一橋大学社会科学古典資料センター専門助手)

(補)

本校脱稿後、トーマス・スタウントンについて、次の研究があることを確認できた。松浦章「清朝官吏の見た George Thomas Staunton」『或問 WAKUMON』No. 13, 2007年、9-18頁。マカートニー使節の通訳として活躍したトーマス・スタウントンの姿、また、清朝の官吏がそのスタ

ウントンをどのように見ていたのか、マカートニーの日記などに加え、清朝の档案史料から考察しており、その内容は大変興味深い。

(QF-105)

貴 A-217



NARRATIVE
OF THE
CHINESE EMBASSY
TO THE

KHAN OF THE TOURGOUTH TARTARS,

IN THE YEARS 1712, 13, 14, & 15;

BY

THE CHINESE AMBASSADOR,

AND PUBLISHED, BY THE EMPEROR'S AUTHORITY,
AT PEKIN.



TRANSLATED FROM THE CHINESE,

AND ACCOMPANIED BY AN APPENDIX OF MISCELLANEOUS
TRANSLATIONS.

BY

SIR GEORGE THOMAS STAUNTON, BART.
LL.D. & F.R.S.



LONDON :

JOHN MURRAY, ALBEMARLE STREET.

1821.



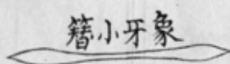
【図版 1】異域録（英訳）標題紙

嘆咭喇國新出 種痘奇書

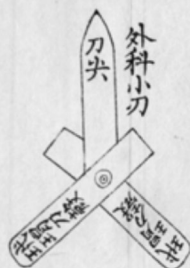
此臂形一點處
即種痘方位也



此象牙小簪
長寸許兩頭
宜尖箔利



此外科小刀宜尖箔利
約長寸許外有玳瑁刀
殼兩邊夾住臨用撥開



痘形

種下至第九日形
模如此便是真痘

臂形

外科小刀

刀尖

簪小象牙

【図版 2】スタウントン訳「嘆咭喇國新出種痘奇書」標題

新訂種痘奇法詳悉

天花之症。原西邊諸國本無。前於一千一百餘年。由東邊地方傳染。遍行西域。諸國時遇天行。國中無一寧戶。雖都甸僻隅。多因慘遭其害。或損兄弟。或損兒孫。父子親眷。悲切難聞。若僥倖命存。或痘癰疾於耳目手足。難以枚舉。即王侯士庶。家家戶戶。無不驚惶。都以生靈爲重。及至

二

前百餘年。曾有醫書種法。尚未盡善。盡美。試其用法言之。如遇天行時。將好痘者。用小刀取其痘漿。刺在未出痘者臂上。俟數日。痘隨此出。不能盡善。以致殞命。并損害手足耳目。甚而至服藥調治者。亦不知何許。今本國啖咭喇。有蓄牛取乳者甚多。時即嘉慶元年。本國遇值天行。遭經遍戶。紛紛傳說。惟蓄牛取乳者不染天花。

【図版3】スタウントン訳「啖咭喇國新出種痘奇書」本文